

はじめに

「科学で実証された事のみ」が、世界に存在しているのか？ こう正面から問うと、NOとの答えが返ってくるに違いない。

科学は、その当時の大部分の人々が強く信じていた常識を、ひっくり返しなが
ら進んで来た。当時の教義や常識に基づく体制という「大きな抵抗勢力」と「科
学的立場」との「2つの潮流」の熾烈な戦いに打ち勝って、ひっくり返ってきた。

このように、大部分の人が強く信じていた常識・世界観・理論体系がひっくり
返ることは、パラダイム・シフト（枠組み変革）と呼ばれている。

パラダイム・シフトは、当時の教義や皆の常識から出発するのでは無く、観察
や実験による事実に基づく正に「科学的立場」が考えの基に有り産まれたものが
多い。このために、異端者扱いされ、処刑されたり、獄に繋がれた先覚者も多い。

現代においても、「気」、「透視」や「千里眼」（西欧ではリモート・ビューイン
グと呼ぶ）について聞くと、即座に「そんなことは有り得ない」「インチキだ」
と言う『科学者』が多い。なぜ調べも実験もせずに、即座にそう言えるのか？

彼らの根拠は、「教科書に書いて無い」、「権威ある科学雑誌に載って無い」、「今
までに実証された理論から説明できない」、「インチキした人がいた」である。

いつの間にか、「科学で実証された事のみ」が世界に存在しており、「科学で実
証されていない事」は世界に存在していない、に変わってしまっている。えせ科
学者の登場である。唯一「インチキした人がいた」だけが事実に基づいているか

もしれない。しかし、銀行員の中に何人か「インチキした人がいた」、したがって、大部分の銀行員はインチキである、との論理は、小学生でもおかしくて使えない。

逆に、何でも信じ易いのも、科学的では無い。科学の世界では、常に疑って調べる事が大切である。

どんなに既存の理論からみて信じがたい事でも、よく観察・実験し、その事実から出発し、事実に忠実である事が「科学的立場」である。逆に、教義や既存理論から出発し、現象の有無を判断する事は、科学的で無い。しかし、この後者の流儀が学界にはびこっている事は、嘆かわしい。特に、「潜在能力」に関しては強い。現代でも、2つの潮流が対立している。

既存の理論で事実を説明出来なければ、事実を否定するので無く、理論を発展させるべきである。今までの、科学を発展させた様に。

21世紀の科学技術へのパラダイム・シフト（枠組み変革）が、科学技術の革新のみならず、人類と地球環境の健康なる発展のために必要不可欠な局面を迎えている。

20世紀の科学技術は、主として、意識・精神・心から独立した、客観的物質世界を研究対象とするというパラダイム（枠組）を築き、その内部では大きな成果をあげてきた。

反面、意識・精神・心が関与する様々な現象の科学的研究は、20世紀が作り上げたパラダイムの枠外に放置されてきた。その結果として積極的に研究されずに大きく取り残されており、21世紀に、取り組むべき主要な研究対象分野である。

この分野には、気功、瞑想、笑い、音楽、香り、森林浴など、人間のリラックス、予防医療、健康の維持増進、癒しや自然治癒力（精神神経免疫）、人間の持つ全能力の開花のための教育、心豊かな教育、など人間の潜在能力と深く係わっているものが多くある。

さらに、この分野には20世紀の科学技術のパラダイムの成果の延長では説明が付きそうもない、人間の潜在能力に関する不思議な現象が存在することが、国内外の複数の研究機関での実験事実で示され、論文などで報告されている。しかし、その機構や原理は全く解明されていない。

そこで、これらの現象、効果、機構や原理の学際的・国際的英知を集めた科学的測定などによる解明が重要である。

これが広く、人間の潜在的な能力の開花と21世紀の科学技術と文化の新パラダイムを生みだし、教育、健康、福祉と社会および個人の心の豊かさの増進をもたらし、生き生きとした生活の実現と犯罪の低減、平和な世界の実現、本格的高齢化社会の医療費の低減や地球環境の健全化などに貢献することが期待される。

他の科学会が扱わない本問題に正面から取り組むために、国際生命情報科学会（*ISLIS*）を1995年に創立し、8年にわたり地道な学術活動等を積み上げてきた。本書はその成果の一端をご紹介しますものである。この間の活動経過は第1部6章に記す。

「初版に寄せて」、第1部と第4部4章には、本書と本分野の研究の必要性が記されている。現職文部科学大臣を始め錚錚たる方々が本分野の研究の推進の重要性を記されている。（しかし一方、本分野の研究を潰そうとする勢力や無難な

事のみを推進する勢力が、まだまだ体制の大勢を占めている。)

第2部には、当学会が主催した17回の「生命情報科学シンポジウム」での発表や当学会誌の各号への論文掲載をしてこられた研究グループの内、日本内の一部の研究例を照会する。頁数を制限したので、そのグループの研究成果の極々一部しか掲載できていない。

これらの点は、第4部2章に今までの総計3,000頁を超える当学会誌の16号分の全目次を掲載して有り、その各研究の要約は巻末に示す当学会誌のホームページに掲載されている。きっと驚く様な研究結果をそれらの中からも多く発見されるであろう。詳細は、著者に別刷りを求めるか、学会誌の各号をお求め頂きたい。

第3部には、2002年に幕張で主催した「潜在能力の科学」国際フォーラムの概要が示されている。詳細は当学会誌20巻2号に500頁近く特集されている。

第4部には、当学会、当学会誌、本分野等の研究を行う国際総合研究機構 (IRI)、国会議員の潜在能力の研究会「人間サイエンスの会」の資料が満載されている。

第5部には著者のプロフィール、第6部には用語解説、最後にはインフォメーションが掲載されている。

本書は、それぞれの著者の責任において書かれたものであり、当学会としての統一見解ではない事をお断りしておく。

本書は言わば本分野の主な科学的研究者とその研究のカタログ的なものである。読者、出版社やマスメディアの皆様には、本書やその資料部の中から、貴重な情報を発掘して取り上げてくださることを期待している。

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載

本書の発行は、具体的原稿依頼から数か月と言う超スピードで、しかも、研究室内部での全くの手作りで行われた、言わば試作的なものです。したがって、読者の皆様には読みにくい点があるでしょうが、早く世に出すことを最優先させたものであり、切にお許しください。

当学会をご支援下さってきた皆様、お忙しい中、本書にご寄稿下さった方々、編集に忙殺された私の研究室ならびに国際総合研究機構（IRI）情報センターのスタッフの方々に、深く感謝致します。

本分野の研究を非常な困難な中で切り開いてきた、故 福来友吉博士をはじめ、本分野の先見的研究者・ご協力者・ご支援者の皆様に、敬意を表明し、本書にて現状をご報告させていただきます。

なお、当学会は小学会でありながら、英文での国際学会誌を地道に発刊するなど、日本からの情報発信等を活発に続けています。経済的には会費だけでは組織の維持が到底無理で、組織の存亡をかけたキャンペーンを実施中です。

皆様からのご寄付などのご援助をよろしくお願い申し上げます。具体的には巻末のお願いをご覧ください。

2004年3月13日 第17回生命情報科学シンポジウム 初日

初版の発刊に際して

監修者代表 山本 幹男